明日架。

乃井村つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明　日　架　。

【Ｎコード】
Ｎ８８８８Ｏ

【作者名】
乃井村つばさ

【あらすじ】
フリーカメラマンの千陽は、ふらりと立ち寄ったカフェで５歳下の大学生、空島飛鳥と出会う。千陽は、彼の自由な名前や性格に惹かれていく。
それは静寂の朝陽のように。

1、愛した名前

この朝陽もこの夕陽も、私に静寂を連想させた。
街はいつだって賑やかだけど、この写真の太陽はすべて、静寂に包まれているようだ。
「千陽(ちはる)さん」
彼は私から煙草を取り上げて灰皿に置いた。
熱っぽい目をして彼は後ろから私を抱きしめた。素肌合わせが気持ちいい。
彼の洗ったばかりの髪からシャンプーのいい匂いがする。私の大好きな香りだ。

「だめよ。お願いだから」
私は、自分でも驚く程細くかすれた声で言った。
「こうしてるだけだよ」
そう言って彼は、華奢な腕を私に強く巻きつけた。
ふう、と彼が吐いたため息が耳を掠めて、身をよじりそうになる。
「俺がシャワー行ってる間、何考えてた?」
その言葉に私は苦笑した。
「昔の事」
すると彼は抱きしめる腕に更に力を入れた。
「男の事でしょ。なんだっけ、マイケル」
「マイケルはいないわ。ダニエル。あと、ヴィンスとジョンとシェイクとアラ……」
「千陽さん」
私は口をつぐんだ。
「忘れられない?」
驚いた。
彼が傷付いた声をしていた事に。

それよりも、「忘れられない？」という言葉に。
ヤキモチ焼きの彼だから、いつもは「聞きたくない」と私を抑えつけるのに。
「飛鳥くん……」
私は回された腕を愛しく掴んだ。
「忘れちゃったよ。過去の事だもの。飛鳥くんが一番知ってるでしょう」
「自由に生きたい、か」
「そう。大空を飛ぶ鳥のように、ね」
私、矢沢千陽と空島飛鳥は、しばらく抱き合ったまま目を閉じて朝陽を待った。

2、出会い

私はフリーのカメラマンをしている。世界中を飛び回って、戦争やハリウッド、はたまた、海や山、月や太陽を思いつくままにカメラに収める。
その数だけ男と夜を過ごした。
「ちはる」
ねっとり絡みつく甘い声で私を抱いた。
抱かれている時は、気持ちよかった。愛してる、と思った。
「ちはる。僕だけの可愛いドール」
そうやって甘い口説き文句ばかりを吐く彼らを本気で愛する事は出来なかった。
「やめて、私はあなたのモノじゃないわ」
そう、私は誰のものでもない。
そして私は日本へ帰ってきた。

理由は、ただ帰りたくなったから。

ふらっと入った小さな喫茶店で、空島飛鳥くんと出会った。
森の中を連想させる大きな木の扉を開けると、テーブル席が3つ、カウンター席が5席ある。テーブルの横の壁に、ぽっかり穴が空いたように丸い窓から光が射している。

私はそこでレモネードを頼んだ。
彼は、黒い腰巻きエプロンがよく似合う男の子だ。
大学生かな、と思った。大人っぽいようでいて、どこか幼い面影が残る青年のように見える。

窓際のテーブルに置かれたレモネードが綺麗で、私は品物を持ってきた彼に言った。
「ねえ、写真を撮ってもいいかしら」
すると、彼はしばらく考えてから、どうぞ、と笑う。
ふっと彼の胸に付いた名札が目に入った。

〈空島飛鳥〉

そらじま、あすか。
なんて素敵な名前なの。

「ちょっと、あなた」
私は彼を呼んでこう言った。
「あなたの写真も、撮らせてほしいわ」
「は？」
彼は眉を潜めた。
まあ、無理もなかろう。
初対面の人に自分の写真を撮らせろ、と言われてすぐに頷く人なんて、そうそういない。
下心があるかは別にして。

「あ、違うの。あなたのじゃなくて、あなたの知っている綺麗なもの。私、日本に帰国したばかりだから」
そう言い換えると、彼はホッとしたように頬を緩めた。
「驚いた。……んー……普通なら断るんですけど、お姉さんの頼みなら聞いちゃう」
ニコッと笑って、彼は言った。
「ちょうど、二時にバイト終わるんです。待っていていただけるなら」

腕時計を確認すると、あと二十分もない。
「ええ、もちろんよ」
私はレモネードに口を付けた。

それからしばらく、彼の事を目で追った。

外見は悪くない。黒髪で少し長めの髪。鼻筋も通っていて、薄めの唇。
私は胸板が厚い男性がタイプだけど、かれの身体は針金みたいにひょろっとしている。

常連客だろうか、商品提供やオーダーよりも、客に話しかけられる回数や時間が多い。

私が感じた事。
彼の笑顔は人懐っこくて可愛い。どこか儚げで、壊したくないと思ってしまう。
彼の笑顔が見たい、と思っている人はたくさんいるはずだ。

「お待たせしました」
空島飛鳥くんは、私の前の席に座ってコーヒーを頼んだ。白いシャツが良く似合う。

「で、なんでしたっけ」
彼は、持ってこられたコーヒーを飲みながら言った。
「私、矢沢千陽。カメラマンをやってるの。それで、あなたの知ってる綺麗なモノとか景色とか……教えて欲しいなあと思って」
すると彼は、しばらく考えてから困ったように笑った。

「好きな景色ならあるんですけど……困ったな」
「どうしたの」
「あの、ここから一時間くらいの所にある海から見る朝陽が大好きなんです。何もない所なんですけど、海に映る太陽がすごい綺麗で」
私は、彼の言葉を頼りに思い浮かべた。

淡い橙が水平線の向こうからゆらゆらと照らす景色。

「でも」と彼は言った。
「今は午後二時過ぎ。日の出までまだまだなんですよね」
スイマセン、と彼は頭を下げる。
「謝る事なんてないわ。それまで暇を潰していればすぐ明日よ」
キョトンとしている彼に私は笑いかけた。
「お礼にお姉さんが、とっておきの場所に連れて行ってあげる」

3、水族館

「空島飛鳥」
「え？」
「名前。空島飛鳥って言うんでしょ」

私は飛鳥くんの黒い車を借りてある場所に向かっていた。助手席に座る彼に私はそう言うと青になった信号を合図にアクセルを踏む。
「いい名前」
そう言うと彼は曖昧に笑った。
「ありがとうございます。でも、俺はそんな好きじゃないっていうか」
「どうして」
「……母が付けた名前なので」
彼の沈んだ声に、これ以上聞くべきではないと悟った。
「……そうなの」
飛鳥くんは大学1年の18歳だ。陸上部に入っているらしく、毎日大変だと言っていた。
「気付いたら、もうすぐ19ですよ。こんなんじゃ、すぐオジサンですね」
「失礼ね。私はもう23歳よ。オバサンじゃない」
すると飛鳥くんはじっと私の顔を見てから言う。
「俺、最初見た時、大学生かと思いました」
「嘘言いなさい。あなた、私の事〈お姉さん〉って言ったわ」
彼はくすくす笑った。

彼と話していると退屈しなかった。
彼は年下だからと言って、図々しくもなく、遠慮もしない。
自由に生きている気がした。

＊　　＊

駐車場に車を止めて外に出ると彼は言った。
「まさかとは思ったけど、いいところって……ここですか？」
「そう、水族館。一人でくる勇気がなかったの」
「千陽さんって……」
「なに？」
すると、彼はにっこり私を見て言う。少し胸がドキッとしてしまう。
「意外と可愛い所あるんだ。お高い女王様タイプかと思いました」
「親しみやすい？」
「はい、ギャップに惚れます」
「馬鹿」

私より遥かに高い彼を見上げて笑いあった。

薄暗い館内をじっくり見て回る。
私は、駆け出しのカメラマンの時に買った大事な、古い一眼レフで彼のシルエットをたくさん撮った。

私がここへ連れてきた時、彼は少し呆れていた。でも、真剣にイワシの群れを見つめる彼はきっとここにいる誰よりも少年のような目をしている。
そういう人なんだ、と私は微笑ましく思った。

時計を見ると、あれから二時間も経っていた。

私は自動販売機でコーヒーとココアを買って飛鳥くんに声をかける。
「飛鳥くん、ちょっと休憩」
ベンチに座って、彼にコーヒーを渡す。
「千陽さんは、ココアなんだ」
「悪かったわね。私、カフェインには敏感なの」
寝る前にカフェインを少し取るだけで、眠れなくなってしまうのだ。
「良いじゃないですか。日の出を見に行くんだから」
飛鳥くんは言った。
「何言ってるの？　これから運転するのはアナタよ。私は寝る」
そう言って私はココアを飲んだ。甘くて、美味しい。
すると、飛鳥くんは一言こう言った。
「やっぱり、お高い女王様タイプなんじゃないですか」と。

4、二人の関係

私達が水族館を出る頃には、閉館時間が近いためか、賑わっていた館内も静かになっていた。
「夢中になっちゃいましたね」
彼は運転席に乗り込んでキーを差し込みながら笑う。
何も言わずに運転してくれる所からして、最初からそのつもりだったのかもしれない。
〈女王様タイプなんじゃないですか〉という言葉は別にして。

「いい写真撮れました？」
「ええ。とても」
私は窓の外を見る。いつの間にか陽が短くなって、既に街は光で綺麗に飾られていた。今年は一人のクリスマスだな、と急に思ってしまった私自身にため息をつく。
私は、鼻歌交じりにハンドルを切る彼に聞いた。
「どこへ行くつもり？」
彼が一瞬だけ、私の方を見て笑う。
「俺、料理だけは得意なんです。ご馳走しますよ」
つまり、彼の家に行くのだ。どの国でも、所詮は男ということか。私は皮肉を交えて言った。
「いつもそうやって、彼女を家に誘うのね」
すると彼は、カラカラと笑った。
「どうかな。でも、千陽さんは彼女じゃない」
――ああ、そうだ。私と飛鳥くんは、恋人じゃない。今日会ったばかりの他人だ。
窓の外を見ると、賑やかな夜の街を寄り添う恋人たち。みんな幸せそうに笑っているのが見えた。

彼の家は、昼間のカフェから割と近くの高層マンションだった。彼は東北から上京してきて一人暮らしをしているという。

「……ずいぶん大きな部屋ね」

彼の部屋は一人暮らしどころか、二人で住んでも広すぎる部屋だった。

白を基調とした爽やかな部屋だ。開けたリビングにソファとテーブルとテレビがあり、向こうには大きな出窓が幻想的な夜景を映す。

「家賃はどうしてるの？　まさか、あんなカフェのバイト代で払える部屋じゃないでしょう」

「……父親が買ってくれたんです。あの人、お金だけは持ってるから」

飛鳥くんは、冷蔵庫の中を確認しながら苦笑した。寂しそうに見えたのは、どうしてなんだろう。

「お腹空きましたよね。すぐ作りますから。買い物行ってないからあり合わせで悪いけど」

彼は元の調子に戻って、シャツの袖をを几帳面に捲り上げた。

「なんでもいいから、指切らないでよね」

私はお礼を言う代わりにそう言うと、キッチンの向こうから、そんなこと有り得ませんよ、と言うように笑い声が返ってきた。

私は、彼がガタガタと料理をしている所を見に行ってみる。なるほど、彼は手際が良くてなかなか器用なようだ。私なんかは、外国の男性に全て任せて本当に〈お高いお嬢様〉のような扱いを受けていたから、料理をする機会なんて滅多に無かった。彼らは、私を隣に引きとめておく事しか考えていなかったのだ。

それから少しして、白いテーブルの上にサラダとスープとふわふわのオムライスが運ばれてきた。料理が得意だというから身構えてしまったけど、庶民的な洋食でホッとした。私もこのくらいなら多

分作れる。
「こんなもんで許して下さい。冷蔵庫の中、何も入ってなくて」
彼は、グラスに氷を入れて冷たいミネラルウォーターを注いだ後、レモンを薄くスライスして浮かべてくれた。
オムライスを一口運んで笑みが出る。
「ん。おいし」
彼は「ああ、良かった」と安堵した様子だった。
半分程食べた時、はっとして時計を見る。八時になろうとしている所だ。

日の出まで、あと約十時間。

5、静寂の朝

暗闇の中を車のライトが照らす。
私はあくびを咬み殺して、隣で運転をする彼を横目で見る。
あれから私たちは、電気も付けずに語り明かした。

「お喋りみたいに体を重ねるのは、俺だって楽しいし、好きですよ」
私が過去の話をした後、飛鳥くんは私の横に座り、月の光が部屋を照らす中でそう話した。
「でも」彼は言った。「あなたとは、そうなりたくない」
「どういう意味？」
彼は私の瞳を覗き込み、そうして一度、目を伏せてから寂しそうに笑った。
「俺、母親に捨てられたんです」
私は黙っていた。
「もともと両親の仲は悪くて、喧嘩が絶えなかったんです。小学二年生の時に両親が離婚して、母親と暮らすことになりました」
彼は、一呼吸おいてから続けた。
「離婚してからすぐ、母親は俺を小さなアパートに残して帰って来なくなったんです。２ヶ月頻度で１５万円を置いていくだけ」
心なしか泣いているように見えた。震えた声で彼は言う。
「たった１０歳で！　俺は永遠なんてないって知った。愛情も。母親が置いていくお金も、使えばすぐに消えていく」
「飛鳥くん……」
「恋人だって、出会えば必ず別れがくる。いくら体を重ねても……愛しても……気持ちは変わる」
彼は確かに泣いていた。私は彼の肩に手を伸ばすと、されるがままに私に寄りかかった。

「だから……だから、傷つくのは嫌。名前でくくる事なんて意味ないんだって……」
大粒の涙を流す彼は、まるで子供のようだった。あの時流せなかった涙も、甘えられなかった寂しさも、悔しさも、寄りかかった肩の重みから全て伝わってくるようだ。
私は「大丈夫だよ」と繰り返しながら、動かないように、バレないように、ひっそりと涙を流していた。

彼の話の結末は、父親が引き取ってくれた、という事。あんなに広い部屋を与えた父親も、お金を置いて出て行った母親と同じような心理だろうか。

構ってやれないから、これで好きにして、と。

一度は愛し合って、望まれて来た子なのに、どうして放っておけるんだろう。

空もぼんやりと明るくなってきた頃、車が浜辺に沿う道の端に止まる。
「着きましたよ」
彼の声で、うとうとしていた私は小さく伸びをした。
「ん……。ああ、間に合ったわね」
「少し早いくらい。……外は寒いですよ」
「いいの、写真を撮るから」
飛鳥くんの言葉も聞かずに、車から出た私はカメラを持って、日の出前のぼんやりした空と海にピントを合わせた。

冬空の下、潮風が異常に冷たい。外国で慣れたはずの寒さも忘れるほど、私は間違いなく日本人だ。
シャッターを何度か押してから、ひんやりした空気を肺いっぱいに吸ってみた。一気に眠気が覚める。車の方を振り返ると、飛鳥くんがあくびをしている所だった。パチッと目が合うと、彼は困ったように笑いながら車から降りてきてくれる。
「日の出まで、あと少しありますよ」
飛鳥くんは私の肩にふわっとブランケットを掛けた。
「ああ、ありがとう」
それを握りしめて私は、はぁ、と息を吐く。
じっとしていると、あんなに遠くで満ち引きしている波にさらわれそうだ。それほど、辺りは静寂に包まれていた。

「……あ」
しばらく黙っていた彼は、地平線を指差した。
「……わあ」
私は、海の中から少し顔を出した静かなオレンジ色に目を細める。
「素敵……なんて、贅沢な景色なの……」
思わず口からこぼれる感嘆の言葉に、飛鳥くんが答えた。
「気に入ってもらえたようで、俺も嬉しい」
私は写真を撮るのも大概に、朝陽をこの両目に焼き付けようとした。
海に映る太陽のせいで、まるで太陽が海の中にあるように見える。ゆらゆらと不規則に波打つ太陽が、水面に光を泳がせた。
私の耳に届くのは、静かな波の音と、時折冷えた指先を温める飛鳥くんの吐息の音だけ。なんて静かに朝を運んでくるんだろう。

太陽が完全に海から出た所で私達は車に戻った。
「何処へ行く気？」

「それは千陽さんの方。何処へ帰るの？」
「……今日はホテルにでも泊まるわ」
私は、世界中での放浪生活で家族に愛想を尽かされてしまった。
高校を中退してからの5年の海外生活で失ったものは、居場所だ。
「今日はって……明日は？」
「明日も同じ」
「あさっては？」
「……あさっても。しょうがないじゃない！　今更家に連絡したって、また……」

〈お前なんて知らない！〉
2年ぶりに帰った私を待っていたのは、そんな母の言葉だった。
確かに、髪の毛は伸び放題で赤く染まり、心身共に私は変わった。
でも、我が子にそんな言葉を言えるとは思わない。
家を出た姉から聞いた。
「お母さんは、貴方が高校を中退して放浪していた事について、ご近所からいろいろ悪く言われていたの」と。
何度も謝ろうとした。でもその度に母は、私をまるで他人のような冷たくて鋭い目をして、こう言ったのだ。
「お前なんて知らない！　どこかで死ねば良かったのよ！」
それから、家族と関わることを止めた。
二十歳。まだ何も知らない、ただの子供だ。いくら成人したと言っても、二十歳なんてそんなもの。

はあ、と飛鳥くんはため息をついた。
「千陽さんは、それでいいの？」
「やめて。もう過ぎた事よ」
「そんな事言って……」

彼は私の瞳を覗き込んで、優しく言った。
「良かったら、俺の部屋自由に使ってください。あんなに余ってるんだし」彼は笑う。「その方がホコリばかり溜まるよりも、よっぽど良い」
「……でも」
「でも？　いつ発つかも分からないんでしょ。落ち着くまで、使えばいい。利用できるものは利用するべきだ。……あ、俺が変な気を起こさないかって心配？　大丈夫。昨日言ったでしょ」
カラカラと笑って、車を走らせた。
私は、小さく頷いて遠ざかる海を見つめた。

5、静寂の朝（後書き）

ありがとうございます！

ついに、千陽と飛鳥の紹介編も終わりました！　……長々とすみません（泣）

第七話、八話、九話と、どんどんどんどん更新していきますので、よろしくお願いします。

ここまで、評価してくださった先生方、ありがとうございましたm（＿＿）m

評価・感想、お待ちしております！

続きもお楽しみくださいませ。

6、憂鬱の休日（前書き）

この度は手違いで一話分抜けてしまいまして、申し訳ございません。

これからも、明　日　架　。をよろしくお願いします（＾Ｏ＾）

懲りずに読んでいただけたら幸いです！

6、憂鬱の休日

「ふぁ……飛鳥くん、おはよ」
「……ああ、千陽さん。おはよう。今パン焼くから、顔洗ってきたら？」
飛鳥くんは、いつものようにシャツの袖を捲くってキッチンから顔を覗かせた。
母さんのような事言わないでー、と私は彼に文句を言いながらドアを出る。冷たい空気に身体をさすりながら、私は洗面所で顔を洗った。ついでに、ボサボサになった髪にくしを入れる。随分長くなった。別に伸ばしてる訳じゃないけど、切りたい訳でもないのだ。
リビングに戻ると、四枚切りの分厚いパンとハムエッグが皿の上でいい匂いを出していた。隣には、ガラスの皿の中でちぎったキャベツをトマトとコーンが彩る。
飛鳥くんは、家事全般を全てやってくれる。私が不器用なせいもあるだろうが、彼は何でも要領が良くて、主婦業に向いていた。
「コーヒー飲むでしょ？」
飛鳥くんがカップを二つ持って椅子に座った。
「ありがとう」
カップを受け取ると、私は冷えた指先をそれで温めた。
「今日の予定は？」
飛鳥くんは、パンにマーマレードジャムを塗りながら聞いた。
「ないわ。一日家にいる、やることがあるから」
「ですよね。……外はクリスマスシーズンですよ。気分転換に写真でも撮ってくればいいのに」
彼は、困ったように笑った。
私がこの家に来てから1ヶ月と少し。早いものであさってはクリスマスだ。
「嫌よ。虚しいだけだわ。……あなた一人で行けば？」

私は彼を睨んだ。
「……じゃあ、俺は出かけて来ます。ちゃんと、留守番していてくださいよ」
私たちは黙りこくった。
「ごちそうさま。……良い休日を」
飛鳥くんは、朝食を食べ終えて食器を流し台に持って行く。
私は彼の言葉に小さく呟いた。
「薄情者……」
私の用事が何もないって、飛鳥くんは知っているのにわざと突っぱねる彼にカチンと来たのだ。
彼はいつも、年下のくせに私をからかうような言葉を口にする。私が怒る姿を見て楽しんでいるようだ。サディスティックな嫌な男だ。
「千陽さんも、一緒に来る？」
私が流し台に食器を持って行くと、皿を洗う彼が含み笑いをしながらそう聞いた。
「行かないわよ、馬鹿！」
私は、あっかんべーをしてから、わざと大きな音を立ててドアを閉めた。ドアの向こうでクスクスと笑う飛鳥くんの声が聞こえた。

私は部屋に入り、着替えてから、読みかけの本を取って敷きっぱなしになっていた布団に横になった。
部屋の外でバタバタと飛鳥くんが動き回っているのが分かる。きっと出掛ける前に洗濯物を干したり、掃除をしたりしているんだろう。彼には感謝する事ばかりだ。
本に集中していると、遠くの方で「行ってきます」と飛鳥くんの声がした。急に静かになった家の中に寂しくなって、私は思わずマフラーを巻いた。

＊　　＊

私たちの関係は、飛鳥くんが言うにはただの同居人。もちろん、私もそれで納得している。……今のところは。

でも、もしも――もしもの話だけど――飛鳥くんが私を好きになって、私も恋に落ちる事があったら。その時に、飛鳥くんは私を『恋人』と言ってくれるのだろうか。

〈名前でくくる事なんて、意味ない〉という彼は、私を『彼女』と呼んでくれるだろうか。

私は、彼の働いているカフェに向かった。今日、彼はそこにいない。

「いらっしゃいませ」

カランカランとドアのベルが鳴る。私は温かいココアを頼んだ。外は凍える寒さだ。予報では、明日の明け方から雪が降るらしい。

しばらくして、男性店員が、私の目の前にココアのカップを静かに置いた。一口飲むと甘さが一気に広がる。窓の外は、からからと晴れた空。店内は耳に優しい洋楽。なんて贅沢で完璧な時間だろう。

「……千陽？」

それは聞いたことのある、鼻につくような甘えた声。

「お姉ちゃん……」

どうしてここに、と聞くより早く、姉、矢沢万理（やざわ まり）は私を抱きしめた。

「やっぱり！　窓から見えて、そうじゃないかと思ったの。何してたの？　日本に帰って来たなら、連絡くれてもいいじゃない！」

私は姉を見ずに言った。

「どうして連絡しなきゃならないの？　どうせ、すぐ居なくなるんだもの……」

姉はため息をついて、私の向かい側に座る。

「千陽。三年も経てば状況は変わる。……二年前に、母さん……死

んじゃったのよ？　ねえ、知らなかったでしょう。自殺したの」
姉は傷付いた目をして言った。
「母さん、うつ病だったの。いろいろ治療したんだけど……やっぱりつらかったみたいね。飛び降りちゃった」
知らなかった。母がうつ病だった事も、治療していた事も、死んでしまった事も。完璧だと思っていた時間が、ガタガタと音を立てて崩れていくようだ。
「私が……」
私が、世界に興味を持ったから？　私が母の反対を押し切って、高校を中退したから？　そのせいで、母は……
「違うわ、千陽。」
姉は相変わらずおっとりした口調で言った。
「確かにね、千陽は、きっかけだったかも知れない。けど、それはきっかけであって、原因ではないわ。父さんが事故で死んだ時から、気が滅入っていたのは確かだもの」
自分を責める事はないのよ、と姉は私を覗き込んだ。
「でも……」
「悪いと思うのなら、実家に帰って母さんに手を合わせて来なさい。あなたの部屋も私物も、そのままにしてあるんだから」
それより、と姉は言った。
「あなた、今どこに住んでるの？」
「ん。ちょっとね」
私は曖昧に言葉を濁した。年下の男の子の家に居候しているなんて言ったら、姉はその事について根掘り葉掘り聞いてくるに違いないのだ。女はいつになっても、恋の話が大好きだから。
「私ね、結婚して、去年子供を産んだの。可愛いよ、男の子。実叶（みなと）っていうの。実家に、旦那さんと子供と三人で住んでる。……家族はいいわよ。毎日が色付いて見える」
姉は見るからに幸せそうだ。
「だから、一度でいいから遊びに来て。ちゃんと挨拶しにね。あな

た、もう叔母さんなのよ？」
うふふ、と笑って言った。
「おめでとう。近いうちに行くわ」
私はそう言って、席を立った。
「あら、もう行くの？」
姉はキョトンとして見上げた。そういう、とぼけた顔が似合う女だ。
「うん。ごめん、明日あさってにでも、お線香あげに行く。その時にまた」
分かった、待ってる、と彼女は言って手を振った。
勘定を済まして、分厚いドアを開けて出る。ひんやりとした空気が一気に体を満たした。
マフラーを口元まで引き上げて、ため息をついた。姉が結婚して、子供を産んで、実家に住んで。それはすなわち、私には帰る場所がないという事を指していた。
ふと、飛鳥くんに会いたくなる。会ったって、きっといつもみたいに強がってしまうけど、とにかく今は、静かに隣にいてくれる飛鳥くんが恋しかった。私は、家に戻って本の続きを読む事にした。
――なるべく早く、飛鳥くんが帰ってくる事を祈って。

7、変わる景色

「遅い！　何やってたのよ、馬鹿」
飛鳥くんが帰ってくるなり、私は抱いていたクッションを彼に投げ付けた。彼は上手にキャッチしながら、それには答えずに優しく微笑む。
「そっか、ご飯食べたんだ。じゃあ、コーヒーでもいれようか。千陽さんはミルクティーね」
そう言って彼はお揃いのカップを取り出した。
私は黙って窓の外を見つめていた。今夜は綺麗な三日月だ。何か考えてしなければ、景色が涙で滲んで見えるから、必死で堪える。
「どうぞ。落ち着きますよ」
飛鳥くんが、まるでカフェ店員のように静かに私の前にカップを置いた。
「……千陽さんがそんなこと言うなんて、俺が留守の間、何かあった？」
飛鳥くんは、いつかのように私の隣に座る。
「ねえ、千陽さん？」
「何よ！」私は言った。
「……あったわよ！　ありまくりだわ。……どうして貴方は、傍にいて欲しい時にいないの？」
私が顔を上げて飛鳥くんに言うと、彼ははっとして、私の目元に触れる。
「……泣いてたの？　目が腫れてる」
彼の手は、とても大きくて優しい。年下の男の子なのに、温かくて甘えたい気持ちになる。堪えていた涙が塞きを切ったように溢れてきた。
「……馬鹿飛鳥。見ないでよ……っ！」
私は飛鳥くんの手を振り払ってそっぽを向こうとしたが、それは

叶わなかった。彼が私を抱きしめたからだ。
小さい子にするように、何度も繰り返し、優しく頭を撫でた。
「泣き顔、見られたくないなら、見ないから……」
飛鳥くんは私を抱きしめたまま、静かにそう言った。
彼は訳を聞かなかった。でも私は、今日の話をしようと思っていた。聞かれても、聞かれなくても。彼も、私と同じで家族とは深い亀裂があるから。

＊　　＊

私は彼の肩に寄り掛かりながら、目を閉じる。時計の針の音が空気を震わせた。
「大切なものは、本当に失ってから気付くのね」
「……うん」
「ちゃんと気付こうとしないと、見えないのよ」
「……うん」
「明日、実家に行こうと思うの。飛鳥くん……着いて来てくれる？」
私が彼を見上げて言うと、彼は優しく笑って頷いた。
「いいよ。明日、クリスマスイブだけど……」
そういう彼に私はむっとして言った。
「こんな時に嫌味を言うの？　どうせ予定はないわ」
すると彼は、ふふっと笑った。まるで恋人同士がそうするように、肩をぎゅっと抱いて彼は低い声で囁く。
「俺と一緒だ」
寄り掛かった頭に直接響く飛鳥くんの声に安心して私はもう一度目を閉じた。

＊　　＊

「千陽さん、大丈夫？」
飛鳥くんは実家の前に車を止めて、私に言った。
薄暗い午後３時。外は、しんしんと静かに雪が降っている。天気予報が当たった。今夜はホワイトクリスマスだ。
私の実家は、飛鳥くんの家から車で三十分くらい走った所にある。家の向かい側は畑があって、小さい頃は家族全員で茄子やトマト、スイカ等を育てたものだ。あの時は、全てが楽しかった。
私は、ゴクン、と生唾を飲み込んだ。正直、夜も眠れない程に緊張していたのだ。もう母はいない。それなのに、あの家の中に入る事を考えるだけで、身体が固まってしまう。
〈お前なんて知らない！　……どこかで死ねば良かったのよ！〉
母の言葉が私の柔らかい心に突き刺さって、今も時々痛む。一生消えない傷。
「だ、大丈夫……母は、いないんだから……」
私は自分に言い聞かせるように呟いた。
心配ないよ、というように飛鳥くんは私の頭をくしゃっとしてから、私たちは車を降りた。
彼と一緒に帰ることは、昨日の夜に電話で伝えてある。飛鳥くんの事は、ただの同居人と紹介するつもりだ。どう思われても、それでいい。
古びた白い門の横にあるインターホンを押そうとした指が止まる。すると、躊躇った右手を飛鳥くんの右手がぎゅっと握った。そろそろ、とインターホンを押すと、直ぐにあの甘えた声が聞こえて来る。
『はーい。どちらさま？』
「あの……」
思わず声が掠れた。咳ばらいをしてからもう一度言う。
「ち、千陽です……」
あーはいはい、と姉は受話器を置いて玄関に向かったようだ。

程なくすると、静かに玄関が開いて姉は私ではなく、飛鳥くんを見て深々とお辞儀をした。
「わざわざ、ごめんなさいね。どうぞ」
どうも、と飛鳥くんも軽く会釈をしてから私の背中を押した。私は、一度深呼吸をしてから門をくぐって行く。
「淳弥(じゅんや)さん。実叶(みなと)見ておいてくれる？」
姉は、部屋の奥にそう声を掛けて、私達を仏壇の間に案内する。襖を開けて、どうぞ、と促した。
そこには少し痩せた母の遺影が父のそれの隣に飾られている。そう。確かに、母はこんな顔をしていた。母と会うのは3年ぶりだ。笑顔の母を最後に見たのは高校生の時。もう5年も前の話だから忘れてしまった。声さえも今では思い出せない。
私は、お線香を上げて手を合わせた。母は今、どんな顔をしているのだろうか。せめて、私を忘れていない事を祈る。
「さあ、お茶でも入れるわ。外は寒かったでしょう」
飛鳥くんが手を合わせ終わったのを合図に、姉は言った。
仏間を出て左に突き当たった部屋がリビングだ。当時の面影はほとんどなく、カーペットだった床は綺麗にフローリングに変わっている。薄型テレビの台には、姉夫婦の写真でいっぱいになっていた。
「綺麗にしてるんですね。さすが女の人だなー。ね、千陽さん」
赤いソファに座る私の隣で、飛鳥くんは私を見て言う。
「なによ。私だって、やってるじゃない」
掃除、洗濯、料理。やる気はある。でも、私の掃除はただ部屋を散らかしているだけ、洗濯をすればセーターは縮ませてしまうし、料理に関しては、包丁の使い方が危なくて、時間が掛かりすぎるので、飛鳥くんがやらせてくれないだけなのだ。
「千陽は、昔からぶきっちょだもんね。美術の課題の絵画なんて、酷かったのよ。千陽、覚えてる？」
姉は私たちに紅茶を入れて持ってきてくれた。
「忘れもしないわ。あれは、色を塗るのが失敗したの。下書きは上

手かったのよ」
「はいはい。それが不器用って事なの。カメラマンなんて一丁前に……困ったものだわ」
眉を下げて笑う姉に、私はムスッとした。なんでも出来る姉とは違うのだ。私の不器用なりのもどかしさも姉には分かるまい。
「ところで」と姉は言った。「いつまで日本にいるの？」
「さあ、分からないわ」
私は言った。私の旅に計画なんてない。気の向くままに、行きたい時に行きたい場所に行くのだ。
「あなたもいい歳なんだから、早くいい人見つけなさいね。お姉ちゃん、相談くらい乗るからさ」
姉は私に言った後、飛鳥くんに笑いかけた。
「ごめんなさいね。忙しいのに、千陽の面倒まで見てくれて。この子の事なんて気にしないでいいから、精一杯青春を謳歌しなさいね」
飛鳥くんは、曖昧に笑った。　クリスマスと云うだけあって姉はもう晩御飯の支度をしなければいけないらしい。食べていけばいいのに、と言われたけれど、家族団らん水入らず、断って帰る事にした。
またね、と手を振る姉に苦笑しながら手を振り返して、飛鳥くんが車を発車させる。
はあ、とため息をつく。ふと窓の外を見ると、一カ所だけ、クリスマスのイルミネーションに輝く店を見つけた。妙に浮いて見えるそれを過ぎながら、私達は帰路についた。

8、聖なる夜

家に着いてすぐに、彼女から電話が掛かってきた。
「……千陽さん、携帯鳴ってない？」
私の黒いバックの中でバイブする音を飛鳥くんが聴いた。
「お姉ちゃんからだ……何かしら」
ディスプレイに表示された『矢沢万里』という文字に身構える。
通話ボタンを押すと、少し焦ったような声が聞こえてきた。
「……はい」
『千陽？　ごめんなさい。あなたの部屋の和英辞書を借りちゃったの』
「……別に大丈夫よ。使わないから」
大学受験の為に、母が買ってくれたものだった。結局、使いはしなかったけれど。
『違うの。辞書の間にね、母さんからの……手紙が挟まってるの、あなた宛てに』
目の前が一瞬暗くなる。
今さら何だっていうんだ。私は十分、母に傷付けられた。これ以上、私に何をしようするの？
『飛鳥くんに、渡しておくくね。彼、あのカフェにいるんでしょう？』
「いいわよ。今さら何だって言うの？　見たくない」
『見なくてもいいの。捨てちゃうのは何だか罰が当たりそうじゃない？　受け取ってくれればいいの』
それじゃあ、と、言いたい事を言うと姉は電話を切った。マイペースな人だ。
ため息をついた私に、すかさず飛鳥くんが聞く。
「お姉さん？　何だって？」
「明日のお昼、飛鳥くんに会いにカフェに行くそうよ。だから、よろしくって」

「俺に？　どうして？」
キョトンとする彼の質問には答えず、私は苦虫を噛んだ。
「……最低のクリスマスプレゼントだわ」
シンプルな白い携帯をジーンズのポケットにねじ込んで、飛鳥くんの入れてくれたココアを飲んだ。
ふと、彼は言った。
「ケーキでも、買って来ましょうか」
「私、チョコレートケーキがいいな。あと、ワインがあったら最高ね。……あ、飛鳥くんがまだ未成年だから、そういう訳にはいかないか」
「千陽さんさえ目をつぶってくれたら、関係ないんだけどな」
彼が肩をすくめる。
「ワインの味も分からないくせに、何を言ってるのよ。……でもそうね、せっかくだから、シャンパンでも飲みましょうか」
「アルコール入りの？　飲んでもいいの？」
「ええ。特別よ。まあ、私もそのくらいから飲んでいたもの、人の事言えないけどね」

私が飛鳥くんくらいの時は、多分オーストラリアにいたと思う。一文無しで初めて行った外国で、私はアランに出会ったのだ。
〈君も、この絵が気に入ったかい？〉
行くところもなく、ふらりと足を運んだ美術館で、突然声をかけられた。驚いて振り向くと、彼は金のブロンドヘアーを綺麗に揺らして私に笑いかける。
〈これは、朝陽だと思うかい？　それとも夕陽？〉
彼は、私が見つめていた絵を指差して言った。
どこにでもありそうな、海と太陽の絵だ。海から半分と少し顔を出した太陽が、辺りを橙色に染めている。
〈……夕陽だと思う〉

〈どうして？〉
〈だって、寂しい感じがするもの〉
すると彼は、背の低い私を覗き込んだ。
〈この絵はね、正解がないんだ。だから見てる人の気持ち次第なんだよ。君が……寂しい、と言ったようにね〉
彼の端正な顔がすぐ側にある事に胸の鼓動が乱れる。思わず俯いた私に彼は手を差し出した。
〈アランだ。僕に出来る事なら、何でも言って。可愛いジャパニーズドール〉
私は急いで手を握り返して、意を決して口を開いた。
〈私を、あなたの家に置いて欲しいの〉
その夜私は、女になった。
世の中の甘さに気付いた。
私は女。それが生きる手段になったのだ。

＊　　＊

飛鳥くんが買い物に行くと言うので、私もついて行く事にした。今にも鈴の音が聞こえてきそうな聖なる夜。ホワイトクリスマスだ。
「わあ、可愛い……」
私達は、スーパーで一通り買い物が終わった帰り道に、ケーキ屋さんに寄った。
「ブッシュ・ド・ノエルですね。買いましょうか」
飛鳥くんは、店員に注文した。丁寧に箱に入れてもらい、崩れないように優しく持つ。
「……飛鳥くんは、私の事どう思うの？」
私は店を出た所で、ふと言った。
「どうって？」
「だから、お姉ちゃんが言ってたでしょう。私って、飛鳥くんの邪

魔？」
　すると、彼はカラカラと笑った。
「千陽さんってさ、随分ストレートに聞くよね。……でも、俺は千陽さんの事、そんな風に思ってないですよ。……正直言って、ちょっと悔しかった」
「何が？」
「俺が……千陽さんの――」
「あ、千陽！」
　飛鳥くんの声を遮って、聞き覚えのある声。今日この声を聞くのは三度目だ。
「……お姉ちゃん……」
　旦那と子供を連れて、少し離れた所で手を振っている。
　姉は私に駆け寄って、笑った。
「本当に、何度もごめんなさいね。これ、やっぱりどうしてもすぐに渡したくて……今あなたに連絡しようと思ってたの」
　彼女は、小さなバックから二通の白い封筒を取り出した。
「はい、母さんから。……読まなくても良いから、取っておきなさい」
　ふと目をあげると、姉の旦那が私に小さく会釈をした。
　私は、その封筒をバックに入れてお礼を言った。
「……わざわざありがとう」
「いいのよ。メリークリスマス、千陽、飛鳥くん」
　姉はそう言って身を翻した。
「マイペースな人ですね」
　飛鳥が姉の姿が小さくなってから言った。
「昔からよ」私はため息をつく。「良くも悪くもね」
　私たちはどちらともなく歩き出す。バックの中に入れた手紙が重く感じた。

9、残された想い

――どうして、母さんの側から離れていくの？　――
それは、私には夢があったからよ、母さん。
――女手ひとつで育てた、可愛い娘なのに。どうして、言うことを聞いてくれないの？　――
それは、何にも変えられない素敵な未来を見に行きたいからよ、母さん。
――親戚や近所の方に、どんな顔をして会えばいいか分からない。母さんを困らせないで――
恥ずかしい事なんて一つもないわ。母さんは、私が一流のカメラマンになるのを堂々と待っていてくれたら良かったのよ。
――でもね、あなたに言った言葉は本意じゃなかった――
それでも私は傷付いたわ、母さん。
――頑張って、応援してるって、直接言えればよかった――
どうして言ってくれなかったの？　ずっと、待っていたのに……

私は、白い便箋を握りしめて小さく呻いた。
泣いていたかもしれない。
飛鳥くんが私の手から便箋を取り上げて、テーブルの上に置いた。
「そんなに握りしめたら、読めなくなるよ」
彼は、手持ち無沙汰になった私の手を遠慮がちに握った。
「……お母さん、千陽さんを憎んだりしてないよ」
「違うの。私が憎いのは……赦せないのは……母さんを分かってあげられなかった自分なのよ。母さんの事は、こういっちゃ、アレなんだけど……もう忘れてた。諦めてた。でもね、最後まで謝れなくて……。母さん、世間体を気にする人だし、頑固な所があったんだもの。私が折れて、一言謝って、ありがとうって言えば良かったの……」

飛鳥くんは、何も言わない。きっと彼は気を利かせて黙っていてくれるのだ。まだ、ほんの大学生なのに、人の心の変化に機敏だと思う。

そんな事を、頭のどこかで考えられると言うことは、脳は健康なんだ。いろいろあったから、心が少し疲れているだけなんだ。

私は彼に甘えて、目を閉じた。

もう、母の姿は思い出せない。

「……飛鳥くん」

「なに？」

「お母様には会わないの？　連絡先くらい、分かるでしょう」

飛鳥くんは黙った。構わずに続ける。

「ねえ、一度でいいの。会わなくてもいいわ。せめて、あなたの声を聴かせてあげなさいな」

私は諭すように言った。

「人生は一度きりよ。他人だって同じ。失ったら、戻って来ないわ」

「……もう遅いよ。あの人は、俺の事なんか忘れてる。最後に見たのは、こんなに小さな俺だったんだ」

そう言って彼は、ソファーに座る自分の膝の辺りに手をやってみせる。

「連絡も取ってない。親父は、多分取ってるんじゃないかな……でも、」彼は言った。「俺もいい加減、母親の恋しさとかは、ないからさ」

どうでもいいんだ、と言うように彼は首を振った。

「寂しくならないの？」

「そりゃあ、中学、高校と母親がいたらなあって思ったよ。友達が言うんだ。母親がガミガミうるさい、とかお節介だとか……心配してくれるだけマシだって話だよな。……だけど、もう、全然」

嘘だ、と思った。飛鳥くんは、母親に対する餓えを持っている。ただ、彼は上手に甘えられないだけなのだ。甘え方も知らないのだ、きっと。

「ねえ飛鳥くん」
私は、彼の頭を肩に寄せた。
彼はじっと、されるがままだ。
「いいのよ、あなたの弱い所を見ても、誰も笑わないわ。むしろ、安心するくらいよ。……だってあなた、一つも隙を見せないんだもの。そうやって、強く見せて、背伸びして、みんなを負かしたつもりでいた——違う？」
「……違わない、と思う」
彼は寂しそうに言った。
「我が儘になりなさい。欲張りになりなさい。うんと、誰かを困らせなさい。あなたはまだ十八歳なの。まだ子供でいていいのよ。そんなに大人でいる必要はないの」
彼は、すん、と鼻を鳴らしてから笑った。
「千陽さん、先生みたい」
「そりゃあ、そうよ。あなたより五つも年上なんだもの。私がした後悔を、あなたにしてほしくない。一生抱えていくには重すぎるわ、死の後悔は」

１０、微妙な立ち位置

夜明けが近い。
新聞配達のバイクの音が夢うつつの私を現実に引き戻す。
私は、飛鳥くんを想った。いつか、この顔に、名前に惹かれて出会った彼と私、いったいどんな関係なんだろう。
そんな事を思ったのは、先日行った営業先の編集部で会った高校のクラスメイトのせいに違いなかった。
増田千佳子と言った。すぐに思い出せないくらい、同じクラスと言えど、仲が良いとは言えない関係だった。中退した私だから尚更だ。
私が編集部に向かったのは、彼女の担当している雑誌に私の写真と旅行記を載せてくれるという連絡が入ったからだった。

〈とりあえず半年間六回に渡って書いてもらおうと思ってるの。締め切りは毎月五日。最低でも十日には見本版を作りたいから、お願いね。……何か質問は？〉
千佳子は手際良く説明をして、顔を上げた。顎の辺りでパッチリ切りそろえられた前下がりのボブが揺れる。
〈……ええ、大丈夫よ。よろしくお願いします〉
〈じゃあ原稿はＡ４版でお願いね。……ねえ千陽〉
千佳子が書類を片付けながら言った。
〈なあに？〉
〈あなた、変わってないね〉
〈え？〉
〈少し、取っつきにくい所。昔から、何を考えているか分からなかったもの〉
〈そんなことないわよ〉

私は言った。
〈ある。それを証拠に、いつの間にか高校退学して、いつの間にか海外にいたじゃない〉
〈もう、いいじゃないの。若かったのよ〉
私は苦笑いした。
千佳子は、そんな事より、と得意気に右手の薬指を見せた。ちょうど、結婚の記者会見のような感じだ。
〈婚約したの。二年付き合って、やっと結婚〉
千佳子は、やれやれと首を振りながら、幸せそうに笑った。〈五つ上でね、ほんと、無口なの。芸術家ってほんと個性的よね。画家なんだけど〉
〈そうなの。でも良かったじゃない。おめでと〉
私は千佳子にそう言うと、彼女は、ふふ、と笑った。
〈まあね。幸せってこういう事言うんだな、みたいな〉
〈いいわね〉
今まで、プロポーズされた事なんて数え切れない程あるけれど、結婚なんて有り得ない、と断っていた。もし、彼らの中の誰かと結婚していたなら、私も今頃は、千佳子のように笑えたのだろうか。
〈……千陽は？〉
不意に千佳子が言った。
〈え？〉
聞き返すと、千佳子は顔をぐっと近付けた。
〈恋人くらい、いるでしょう〉〈……〉
いないわよ、と切り捨てようとした。しかし、黙ってしまったのは彼の——飛鳥くんの——顔が浮かんだからだった。
まだ、彼に好きだと言われていない。私も、まだ彼を好きだなんて、そんな事考えようとしていなかった。恋人らしい事もしていないのだから、いない事に違いはないのだけれど……。
〈千陽？　どうしたの？〉
〈……え。あ、嫌だ。ごめんなさい〉

〈恋人の事、考えてたんだ？〉〈違うわよ、残念ながら、いないもの〉

ごめんなさいね、と私は笑った。なんとなく荷物をまとめていたら、千佳子が立ち上がった。

〈あなたとは、これから長い付き合いになるだろうから、また今度、話聞くわよ。記事よろしくね。わざわざ会社に来させて、すみませんでした。外まで送るわ〉

私は、千佳子に続いて会社を出た。

私はカーテンの隙間から射し始めた朝陽に、眩しくて布団を頭から被った。

そろそろ、彼が起きてくるはずだ。冬休みだっていうのに、習慣は恐ろしいものだ。私は、目を閉じた。やっと眠気が襲ってくる。

飛鳥くんはきっと、私が起きるのをいつまでも待っていてくれると思うから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8888o/

明日架。

2011年1月30日18時25分発行